スカイレイヤー

惑思霧想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スカイレイヤー

【Ｎコード】
Ｎ１３０８Ｌ

【作者名】
惑思霧想

【あらすじ】
世界大戦のさなか、どこの国家にも属さず、広い空を自由に飛び回る飛行艇があった。これはそんな飛行艇『スカイレイヤー』のお話…。

序章ー少年よ、空は自由だ

新歴１９５３年の暑い夏の日。
南海のある島ー地図では無人島である島ーに、巨大な鋼鉄の塊があった。
全長は２５０メートル、全幅は３００メートルほどある、エイに似たそれは、両翼の４基の海伍号発動機を唸らせ、多くの作業員にちやほやされながら、大空へ飛び立つ時を待っていた。
その近くで、黒詰め襟を纏った少年が、作業衣の老人に言った。
「じゃあそろそろ行くよ。」
老人は少年に返す。
「行くか……無理はするな。お前さんの親父さんが黄泉で悲しむからな。」
「ああ。」
「お前さんにならばこの『スカイレイヤー』、託せるわい。」
その時、スカイレイヤーの艦橋から一人の青年が叫ぶ。
「カリス艦長！　何時でも行けます！」
「わかった！　少し待てベルツ！」
カリスと呼ばれた少年は青年に返すと、改めて老人に向き直った。
「では、行ってきます。シュライプ機械開発部部長。」
「健闘を祈ります、天王艇スカイレイヤー艦長、カリス・ネメシス殿。」
「うむ。」
敬礼した後、カリスはスカイレイヤーへと駆け出した。見送りながら、シュライプは全作業員に叫ぶ。
「全作業員に告ぐ！　いよいよ天王艇スカイレイヤーが出撃する！　全員退避のちに盛大に砲を撃ち鳴らせ！　派手に見送るぞぉ！」
鬨の声に似た作業員達の声と、派手に鳴り響く祝砲のなか、スカイレイヤーは一際エンジンの唸りを高くし、青空に飛び立った。

スカイレイヤーを見送りながら、シュライプは一人呟いた。
「少年よ、大志を抱け…か。……我が孫よ、空は自由だ。心行くまで飛ぶがいい、そしてやりたいことをやれ。夢は空にある。」

序章ー少年よ、空は自由だ（後書き）

因みに、天王艇は「てんおうてい」及び「てんのうてい」と読みます。

ゆっくりと連載しますので、気長に読んでくださいね。

第1章ー不時着した新米操縦士（前書き）

漸く本編の始まり。第一の主人公が出てきますが…それにしても……。

第1章ー不時着した新米操縦士

それはどんよりした空の日だった。
まだ三等操縦士としてリーゲル国ベルフィール基地に着任してから2週間の新米操縦士、スレッグ・コルドゥバは、布団の中でうなされていた。
「うぅぅ…脚がぁ、脚がこっちにくるよぉ…うわぁぁぁ！」
そんなよくわからない夢から彼を救い出したのは彼の直属の上官の怒鳴り声だった。
「いい加減に起きんかぁ！」
「うわっ！　はいっ！　起きま…す？」
先任の少尉の怒声で布団から跳び起きたスレッグは、隣で仁王立ちしている少尉に怖々挨拶をした。
「し…少尉…おはようございます…。」
「おはようございますじゃないっ！　起床時刻を3分も過ぎよって、さっさと起きろぉ！」
と殴り付けるような声と共に脳天に鉄拳を喰らった。
「はいっ！　すみませんでしたぁ！」
と謝りながらとにかく洗面所へと駆け出すスレッグ。とにかく身仕度を済まし、朝食にもぎりぎりで間に合った。
俗に飛行機と呼ばれる天空艇の操縦士になるには、まず学科試験と健康調査をパスし、軍隊の養成学校に入らないといけない。
それからさらに適性テストを受けて陸海空のどれに進むかを判断してもらい、最低2年の基礎訓練の後に学科、実技、口頭試問と三次にわたる卒業試験を受けてパスしたら、いよいよ軍人として基地に配属するのだ。
もちろんスレッグもその厳しい試練をくぐり抜けてここに居るわけだが、学科はともかく、実技はギリギリ、口頭試問に至っては隣の同級生からこっそり手助けしてもらいパスしたようなものだから、

実は今ここに居なくてもおかしくはないのだ。
「ハハハスレッグ、またギリギリかよ？」
とからかう仲間にスレッグは疲れた声で返す。
「うん…ギリギリだったよ…後少しでまた朝食食べられなくなるところだった…。」
「まだ一日は始まったばかりだぜ、大丈夫かよ？」
「なんか今日は大変な一日になりそうだよ…。」
そう言いながらスレッグは朝食のハムサンドを食べ、フルーツヨーグルトに砂糖を振りかけた。のちに本当に大変な一日になるとは思わずに……。

ようやく午前の任務ーといってもまだ未熟な彼等は基地の見回りと後は演習だがーを終え、やや遅い昼食をとり始めた時、その大変な事が起きた。
大食堂でスレッグが大好物であるエビピラフとレモネードを半分程平らげた時、部屋にサイレンの重低音が鳴り響き出した。
「敵機来襲！　敵機来襲！　直ちに第一種戦闘体制に入れ！」
無機質な声の館内放送が流れ、大食堂の全ての人が食事をやめ、走り出す。スレッグもしぶしぶ残りのエビピラフを諦め、１番近い天空艇の格納庫に走り出した。
広い格納庫には既に整備が終わった機体がエンジンを唸らせ、操縦士を待っている。
上級の軍人を優先して出撃させるため、スレッグが出撃したのはサイレンが鳴り出してから２０後、しかも乗り込んだのは重くて動きにくいが故に彼の苦手とする爆撃艇だった。
「全機に告ぐ、敵は天王艇１機！　だが偵察艇の報告によると『マンタ』である模様！　心してかかれ！」
「マンタ？　…マンタぁ？！」
操縦席でその名前を聞いたスレッグは、素っ頓狂な声を上げた。
「ちょっとそんな話聞いてないよ？！　そんなぁー…初出撃があの

無敗艦、マンタなんて……。」
無敗艦マンタ。それはこの世界大戦という時代も、国境もなにもかも無視して空を悠々と飛ぶその姿形からいつの間にか付いたあだ名。国境侵犯として今まで数多くの国の軍隊が総力を挙げてを倒そうとして何処の軍隊も出来なかった、国籍不明の世界最強の天王艇である。果たしてスレッグはそのような敵と戦って生きて帰れるのだろうか？
「もう…帰りたい…（涙）。」

そのころリーゲル国とコルサック国の国境、オリオ山脈を越えた天王艇、スカイレイヤーも、慌ただしく迎撃の準備をしていた。
「艦内に告ぐ、本艦はリーゲル国の天空艇に発見された。これより戦闘配置に着き、直ちに迎撃戦に入る！　戦闘準備を終えた部所及び天空艇は報告をせよ！」
黒詰め襟を纏った若き艦長、カリス・ネメシスはそう告げると、あらためて席に座り直し、隣の副長席に戻った紺スーツに白マフラーの青年に聞く。
「ベルツ、ここだとベルフィール基地が近いな…そこか？」
ベルツと呼ばれた副長は、席の電子地図に方位磁針を重ねて、
「はい、艦長。航空戦力が大きいですね。ただ、先程電通の反応もありました。近くのサイファ基地からも応援が来ると思います。」
それを聞いて渋い顔をするカリス。
「サイファか…ベルツ、対空戦車はあると思うか？」
ベルツはしばらく何かを調べているようだったが、やがて言った。
「そうですね、対空艇はベルフィール基地に配属されているみたいですし、シュライプ博士の情報では軍部が製造した記録があります、天空艇対策にあってもおかしくはないですね。」
「爺の言うことで外れたことはないからなぁ…あるなぁ…仕方ない。まずは航空戦力を削ぐ為に……。」

その時、二人の居る総合艦橋に、隣の右前方ハッチから通信が入る。
「こちらカルロ。出撃準備整いました。」
「ああ、ちょうどいい、カルロ。ロク、エディーと組んでベルフィール基地に飛んでくれ。滑走路を使えない程度に頼む。」
「了解です。」
「ベルツ、そういうわけだ。君はアルタとリグを連れてサイファ基地を頼む。通信はこちらからする。」
「わかりました。では行って参ります。」
ピシリ、と敬礼をして総合艦橋を出ていくベルツを見送ると、カリスは通信機を手に取り、各部所へ連絡を取り始めた。

右前方ハッチ。カタパルトに架けられ、発射準備を済ませた専用機の「バイオレットスパーク」の隣で、出撃を今か今かと待つ者がいた。橙のジャンパーと同じ色のズボンを着た彼が、先程カリスに通信をしていたカルロことカルロバである。カルロバは他の二人の出撃準備を待っていたが、遂に待ちきれずに通信機で連絡をしていた。
「ロクー、まだ？」
「もう少しだ！」
のんきなカルロバの声掛けに怒り気味な声で返すロクサネ。
「エディーは？」
「全然まだだろうて！　拙者の機体はこの前にかなり痛めて、さっき漸くぶりに直ったんだて！　燃料も弾も今から補給じゃい！　3分間待たれい！」
実際通信機越しにかなりの物音がする。
「ちぇー。早く頼むよー。」
「分かっとるわ、んな位！」
と叫ぶと、ガチッという音と共に通信は切られてしまった。通信機をかけ直しながら愚痴るカルロバ。
「そりゃあ、時間が掛かるのは分かるけどさ、こっちに当たらなくてもいいんじゃない？　……もしもしー。」

通信先は、エディアークである。
「あ、エディー？」
「なんだ一体？　こっちはまだかかるぞ。　俺様のは爆撃艇だからな、爆弾は掛かるんだよ、時間が。」
「うーん、そーかー。」
「早く出たいのはわかるが、しばし待ってくれ。」
「むう……仕方ない、早くしてよぉ？」
「言われなくてもだ。」
そう言ってエディアークも通信を切った。
「うう……暇だ……早く出たいよぉ～。」
通信機を戻し、カルロバがため息をついた時、パヒュッ、パシュッという音が響いた。直後、激しい音と共に足元がグラリと揺れる。
「うわぁっ！」
突然の揺れにその場にへたり込みながら、カルロバはぼやいた。
「ほら、言わんこっちゃない！」
そういうとカルロバは起き上がり、愛機バイオレットスパークにしがみついて乗り込み、改めてエンジンを起こした。
「対空艇だな、または対空戦車。とにかくすぐでられるように、と…。」
エンジンを最大にまで引き上げ、カルロバはその時を待った。

「下方観測隊！状況を報告！」
炸裂音の鳴り響く中、それに負けない大声でカリスは怒鳴った。
「下から対空戦車です！損害は現在確認中！」
怒鳴り返した観測隊の一人の内容を聞き、即座に通信機を繋ぐ。
「右翼、左翼迎撃部隊！弾幕をしっかり張って被弾させるな！　いくら装甲が厚いといってもミサイル数発喰らえば下手したら撃墜だからな！」「エディー！　準備出来次第即出撃！　まずそこいら一帯を焼き払って隠れている対空戦車をあぶり出せ！」「ベルツ！準備出来た奴から順次出撃！　最速でここを離脱して基地を叩け！」

矢継ぎ早に出された指令に、即座に返答が来る。
「了解艦長！　２分後に出撃します！」
「わかりました艦長！　ではまずリグが出ます！」
「わかった！」
ベルツの通信を聞くと、また通信機を繋ぐ。
「艦首迎撃部隊！　下方ハッチから天空艇が出撃する！　弾幕が被らないよう気をつけろ！」
「こちら艦首迎撃部隊、了解！」
スカイレイヤーの艦首下、下方ハッチがゆっくりと開く。そして明るい色彩の天空艇が、ミサイルと迎撃弾幕の中を凄まじい速度で突っ切っていった。
「こちら『カニバル-フェスタ』、リグリス。直ちにサイファ基地に向かいます。」
「こちら艦長、了解した。伏兵には気をつけろ。」
「艦長、こちらベルツ。３０秒後に出撃します！」
「了解。最後はアルタだな。」メタリックマゼンタのベルツの機体が射出されたとき、観測員が叫ぶ。
「方位－１５０から天空艇大隊が接近！　数およそ２００！　およそ５分後にぶつかります！」
それを聞き、カリスは即座に通信機を違う回線に繋いだ。
「カルロ！　先に出ろ！天空艇どもを掻き乱せ！」
カルロバは待ってましたとばかりに張り切って返した。
「了解！　すぐに出ます艦長！」
『バイオレットスパーク』に乗りながら、ハッチの作業員に叫ぶ。
「『バイオレットスパーク』出撃！　ハッチは半開で構わない、開け！」
ベルトを締め、カルロバが「強制出撃」のレバーを引く。すると『バイオレットスパーク』の翼が二つに折れ曲がり、コンパクトに畳まれた。ガチガチガチと歯車の噛み合う音を立てながら右前方ハッチが開く。

「しかし、ただの天空艇じゃ楽しめそうにないね。戦車じゃあ見せ場ないし。ま、いいか。」
「ハッチ半開です！」
作業員の声を聞くと、カルロバは艦橋に通信機を繋ぎ、
「『バイオレットスパーク』、カルロバ！　出撃します！」
と言ったときには既にカタパルトで空に飛び出していた。

「はぁ…帰りたい。」
出撃してから15分、間違って爆弾を一発落としつつも、漸く操作になれて、無事他の天空艇と隊を組めるようになった時、先に出撃していた一次隊から通信が入った。
「こちら一次隊のランジ！　基地に敵天空艇3機が向かっている！」
「こちら二次隊隊長プロキオ。一次隊はどうなった？」
次の言葉にスレッグは戦慄した。
「……壊滅的です…援護の…対空戦車隊も殆どが焼かれて…。敵天空艇は爆撃特化艇、高速戦闘艇、高火力戦闘艇の3機です…！」
「天王艇一機で……！　一次隊って確か100機位いたよね……？」
通信越しに隊長のギリッ、という歯ぎしりの音が聞こえた。
「くっ…わかった、情報感謝する……。」
そう言うと、隊長は改めて通信をした。
「戦闘艇及び爆撃艇はこのまま！　対空艇は敵天空艇を発見し次第戦闘に移る！」
その時、隊の先頭を飛んでた偵察艇から通信が入る。
「前方より天空艇少数が接近！　恐らく『マンタ』の搭載艇『コバンザメ』たちかと！」
遠くに小さな影が3つ見える。
「あれだ！　編隊を解け！　戦闘に入る！」
通信と共にきちんと並んでいた天空艇がばらばらに分かれた、あるものは速度を上げ、またあるものはゆっくりと旋回を始め……。

スレッグは少しずつ上昇しながら速度を上げ、他の爆撃艇と共に『マンタ』を目指した。

「お？　二次隊のお出ましかな？」

遠目には蝿や蚊にしか見えない天空艇の集まりを見つけ、にやりと笑うカルロバ。

「さっきの隊も結構楽しかったけど、今度はどうだろ？」

「カルロ、余り調子に乗るなて。基地までエディーを護るのが優先。」

カルロバをたしなめるロクサネに、さらにエディーが続ける。

「ああ、爆弾も少し捨てて軽いとはいえ、お前の天空艇の最大戦速の半分が限界だからな、戦闘艇相手は無理だぜ。」

「だからエディーを護る為に行くんだろ！　という事で！」

とだけ言うと、カルロバは一気に速度を上げる。

「あ、これカルロ！」

ロクサネが叫んだときには紫色の機体はまさに雷の様に敵陣に突っ込んでいた。

自分の下を矢の様に飛んで行った天空艇を思い出した。

「……速…かったな…。」

あれが天空艇か。本当はミサイルか何か他のものじゃないのか。等と考えながら前を見ると、遠くに小さなものが空を飛んでいるのが見えた。

「あれがマンタだ！　全員上方から爆撃始め！」

第1章ー不時着した新米操縦士（後書き）

後書きでキャラクターの紹介をしようと思っています。

・スレッグ

本名スレッグ・コルドゥバ。リーゲル国の天空艇の操縦士。だがつい二週間前に軍隊学校をぎりぎりで卒業した新米操縦士である。背丈はあまり高くなく、体つきも頑丈には見えない。視力は当然いい。

好物は本編にも出ていたエビピラフ、クラムチャウダーなど。喉が渇くからビスケットやスナック菓子は苦手。野菜ジュースも好きではない。

今回乗っている天空艇は爆撃艇の一種（一応ボマーガールマリーという機種及び設定はあるが割愛）。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1308l/

スカイレイヤー

2010年10月14日11時56分発行